西岡常一の木に学べの感想文

木のこころと自然の声

今治市立南中学校　三年　前田佳本

これが世界最古の力か。修学旅行で見た法隆寺の姿。千三百年以上前の建物の堂々とした姿に、ただ黙って見上げる。沢山の観光客の中で、静かで澄んだ空気を感じた。

法隆寺を復元した最後の宮大工の棟梁、西岡常一さんの言葉に動かされて読み進めた。なぜ、千三百年もの間、天災に耐え今も立派な姿で残っているのか。西岡さんによると、飛鳥、奈良、白鳳と昔の方が、日本の環境に耐えられるように、建築されている。時代が流れるほど、駄目だというのだ。そして、科学技術が発展した現代の技術を駆使しても、千年以上前の、人の力にはかなわないというのだ。道具、技、釘一つまで同じように再現するのは至難の業だ。

法隆寺や薬師寺の建物は、木の癖を生かし、北の木は北側に配置するなど、森の中で木が息づいていたように、建物の中で使われてい

る。建物全体で森を再現しているようだ。湿潤な日本の気候の中では木が建物のために最適な素材だという。しかもヒノキなのだ。ヒノキは木材として最も丈夫であり、年を経てから強度が増す。千三百年もたせるためには、千三百年の樹齢がなければならない。ところが、日本には残念ながらそれだけのヒノキは存在しない。西岡さんは、台湾まで行ってやっと、千三百年耐えられるヒノキを見つけた。木を見抜く素地はお祖父さんから、農業高校への進学を促されたことが大きいと思う。土のことや植物の命について、西岡さんが学んでいるからこそできたのだ。土は自然の元なのだ。日本の山は残念だが、戦争の後、早く育ち、加工しやすいスギが多く植えられた。もし、これから先の未来に法隆寺を直さなければならない時には、それに耐えられるヒノキは存在しない。千年建物を支えるためのヒノキを育てるためには、気の遠くなるような時間が必要なのだ。経済性や効率を追い求め

KYOKUTO 20×20

る現代とは異なる価値観だ。

今、家の近くで、高速道路の橋げたが造られている。鉄骨をコンクリートで覆い、強度を保つために上つス構造という三角形を寄せ集めた方法で支えている。

三十年先には、高い確率でやってくると言われる南海トラフ。高速道路もそれを想定して造られているはずだ。しかし、大地震に耐えたとしても、強固なコンクリートも数千年しかもたない。法隆寺の塔は千三百年。地震の大きな揺れを、逆らわず揺れることで受け流す。この構造を利用して、高いビルの免震構造ができた。昔の人の知恵と技術の見事さには驚くしかない。自然の力と共にあるのだ。

昨年の春、広島県福山市を訪れた。明王院で五重塔を見た。小雨にけぶる静かな寺院で周りに溶け込んでいながら、存在感と重厚感のある塔だった。思わず何度も写真を撮った。絶妙な美しさだった。

明王院の塔も西岡さんの手で直されていた。

KYOKUTO 20×20

まさかここでも、西岡さんの技を見ていたとは。本で初めて知った。ここは室町時代の塔で、木はヒノキではなく、法隆寺と比べると軒も短い。それでも、見上げると美しい。木に見守られているようで、いつまでも見ていたくなる。きれいに掃き清められた庭に静かにたたずむ美しい塔。関わる人たちが、美しい空間と時間を守っているのだ。

法隆寺は現在まで残っているのではない。西岡さん初め、沢山の人の手で現在を生きている。世界に誇る建築にもっと触れたくなった。

西岡さんが復元した、薬師寺の西塔は、東塔（七〇三創建）に比べて大きく造られている。年月でヒノキが収縮し、強度を増し、東塔と同じ高さになるのだ。およそ二百年後、未来を見据えて、自分の仕事はまだ完成していないのだと言う。自然と共にある、壮大な仕事だ。

宮大工さんを束ね、法隆寺や薬師寺を守る

棟梁。たった一人に伝えられる口伝がある。「常塔の建立には木を買わず、山を買え」。「常塔の木組は木の癖組」。「木の癖組は人の心組」というものだ。

木には癖がある。それは育った環境によって生まれる。それぞれの癖を生かして木を組めということ。より強い塔にするために。方角によってできた木の癖を最大限に生かして建物に配置していくのだ。そして、それは人のこころも同じことだ。仕事は棟梁一人がするのではない。仕事をする人たちに考えを分かってもらう必要がある。その工人の心組みを生かすのが棟梁だ。心組みを支えるのは「おもいやり」だ。木も人も存分に生かされていく。

コロナ禍以来、自分は人が集まる場所を避けるようになった。人と関わるのは難しい。それでもやはり人と関わりたいという思いが交錯する。不安やこのままではいけないという焦り。こんな駄目な自分でも、生かされる場所はあるだろうか。社会の人組みの一助で

KYOKUTO 20×20

いたい。今自分の道を模索しい歩いていきたい。自然と人と共に。

KYOKUTO 20×20